
魔法使いの弟子覚書

さかい まひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの弟子覚書

【Nコード】

N5090T

【作者名】

さかい まひろ

【あらすじ】

私のブログの「魔法使いの弟子日記 師匠との対話覚書」に書いている話を一部修正後に掲載をしています。眠りについたらなぜか魔法使いの弟子ということになっていた妙な夢の話と、その夢を見た人間の過ごす現実の世界との話を交互に混ぜながら書いています。

プロローグ1 覚書始まり 師匠との対話 魔法使いの割合の話

ある晩のこと。夢の中にちいさい丸坊主の男が出てきた。面識はない。

男は自分のことを「魔法使い」と紹介し、私のことを「俺の不肖な弟子」と言った。

洗いすぎた小豆色ジャージに首巻タオルという恰好でかなり怪しい。そういう、頭の設定がアレ系の人と関わるとロクなことにならない。無視して下を向き、とにかく目を合わせないようにした。

カチリと音がして煙草の煙が漂ってくる。私は思わずにらみつけた。

「まあ話しだけでもとりあえず聞いていつてくれ。

ファーストコンタクトやねんから。

あのな、もし人間10人おるとしてな。魔法使いの割合って大体どのくらいやと思う？」

答える必要はなかった。大体言っていることがおかしい。男は構わず話し続ける。

「実は、10人中なんと、8人の人間が魔法のチカラを持っているのです！！

すごいやろ？すごい確率やろ。

まあ後の2人は絶対に魔法使いにはなれへん、俗に言う天才っていう人たち。

特別な運動神経や鋭い感覚、並はずれた記憶力や集中力を持っている人たちのこと。

特別な能力持つてるから、魔法なんて必要ないということやねんけどな。

知らなかったやろ？人間ってそんな生き物やねん。」

やっぱりこの人アレな人だ。それともなんか別の宗教の人？
そういう人がなぜ私の夢の中に出てくるのだろう。

今日はそういう不思議な人に会った記憶はない。私の疑念に構わず
男は私の頭上から話し続ける。

タバコのスモーキーバナラの香りが私にまわりついてくる。

「まあ聞いてくれや。で、な。残り8人のうちの3人は、
俺らが棲む世界でない世界が見える人たちのこと。

世間にいる霊能力者とか言う人たちの中にそういう人が多い。

まあ偽物もかなり多くて胡散臭いねんけど、本物が言っていること
は一つだけ。

じつと話聞いていたらおのずと見分けがつくものや。

俺らは100年足らずしかこの世界にしかいられへんけど、最後は
みんなが戻る場所や。

興味があるなら話聞いというて教えてもらっても損はないし。」

男は私の視線の先に移動するためにしゃがんできた。

私は避けようと立ち去ろうと思ったがなぜか足が動かない。

横を向いて視線を避けることしかできなかった。

「そう嫌わんというて。信じられへんやろうけど、基本の話やから。

で、今の霊能力者と天才の話で5人やん？この5人のうち4人が！

すごい魔法をもってるねん。4人もやで。何やと思う？」

うっとおしい。

目をつぶろうとした私の目の前に、男は4本の指を突き出した。

「生きていく事自体が魔法になってしまっておトク体質な人たちなん

よ。

ただ日々湧く問題に対して自分の知恵を絞って考えて、生きていく事が発動条件。

この魔法の力が一番怖いのは、この力は生き物同士をつないでいく、つちゅーところ。

この人たちが作りだす縁えにしの魔法はとにかく強力でああ。

どんな天才でもな、両手で抱えられることしかでけへんけれども、たくさん人間が一つの目標に向かった時のチカラつちゅーのは半端やないやろ？

結局は天才も自分と志を同じくする、おトク体質のためにチカラを使ってしまう。」

男はタバコの火を消して携帯灰皿の中に入れた。

今度はポケットからガムを取り出して噛んでいる。

「たとえば、どんな魔法を自分が持っているか自覚ない人っていうのは大抵、

この縁を作る魔法を持っている人たちや。確率的に多いし強力な魔法や。

発動する人たちってのはあまり多くないんやけどね。一旦発動すれば強力や。

強大になればなるほど、天才達が自分のために能力を精いっぱい使ってくれたりする。

天才みたいに能力を維持する努力も必要ないからローリスク。これはちよつとすごいよ。

まあ、世の中は大抵、そういう縁の魔法を持ったやつらの作るチカラの輪が

幾重にも複雑に絡まっているもんらしいで。せやから。」

男はガムを噛みながらまた、ポケットから点火前のタバコを取り出

す。

私に勧めるような動作をしたが断った。男は肩をすくめた。

「明日の朝になっても俺のことを覚えているとしたらやで。

もう少しやけにならんと日々を着実に生きてくれへんかいな。

大概の人間が生きてるだけで魔法使いや。

あああとひとつ、言い忘れたことがあった。あと一人の話や。」

点火前のタバコを1本、月の光に向けた。

タバコと男の坊主頭が同化して光っている気がした。

「10人中9人の説明はしたやん。あとの1人のことやねんけど。後の1人うちゅーのはそれ以外の魔法を持つ魔法使いのことやねんで。

詳細な内訳はまた機会があったら説明するな。まあ今日はとりあえずココまで。

翌朝君がまた俺のことを覚えていたらまた会えるやろ。

ほな、またな。俺は今日、君と話せてよかったで。

不肖の弟子やけれど俺が一旦面倒みるって決めたんや。とことん面倒みたるからな。」

男は私の顔を見てもう一度ニコリと笑って手を振って立ち上がった。月の光が一層まぶしくなり、男の姿は消えて私は夢から覚めた。

起きて数分後に日常の一般的な「やるべきこと」の洪水に飛び込む私には、

夢の中の話なんて考える余裕はなかった。しかしその夢は忘れられずにいた。

その後も、この男は度々私の夢の中に現れて色々な話をしていくよ

うになった。

日々の仕事で体力を使って疲れているのですぐに眠れる。

だが眠ると今度は魔法使いの弟子としての講釈が始まるのだ。

友人知人に話をしたら「疲れているんじゃない？」と心配をかけてしまいそうだし、

「お薬をもらってくれば」なんて病院受診を勧められたりすると面倒なので相談できない。

しかし色々なことを頭の中にしまいこむことにも結構疲れてきてしまった。

そこで小説を書くことを思いついた。

小説として記録するだけなら、誰にも迷惑や心配をかけることはないし、

頭にしまい込んだものを一旦整理して外に出すことで、少しはさっぱりするかもしれない。

現実の私について

私は半年前にやっと、無職から卒業したばかりのダメ男だ。

今年の初めまでは派遣社員としてとある工場で働いていた。

12月末に「正月休みが30日、次月からの稼働日数も未定」と上司に言われ、

生活のために転職せざるを得なかった。

「不満なら来なくて可。派遣のお前らの代わりなどいくらでもいる」
真っ白な勤務シフト票を顔に叩きつけられた。

貯金などあるわけがない。

寮も退職2週間後に追い出されたので、

実家に転がり込んで居候になった。実家があるだけ私はまだ良かった。

実家はすでに兄貴が作った新しい家族のものになっていた。

私の両親もつかず離れずの距離で兄の家族と向き合っていた。

馴染めない私は完全な居候。就職活動は予想通り難航した。

書類選考を突破できないエントリーシートが毎日届けられた。

運よく面接までこぎつける事が出来ても、

何の特技も身につけてこなかった怠惰な35歳にチャンスがあるわけもなく。

「35歳で派遣だったんすか？」と鼻で笑った若い面接官もいた。
悔しさを掌で握りつぶし面接を受けていた。

いくつ受けたか忘れたところに届いた書類選考突破のお知らせ。

面接受けてみたら即採用的雰囲気。

介護職だった。そんな仕事を自分がするなんて考えたこともなかつ

た。

「とにかく人手不足。常識守って先輩の言うこときいてりゃいいから」

初めての仕事だ。介護なんて善意の塊みたいなやつがやる仕事なんじゃないのか？

そんな簡単に介護ってできるのかよ？と言いかけたがやめた。

とにかく雇われたらどんな仕事でも良かった。面接官がそういうんだから大丈夫だろう。

とくに深く考えず雇われてすでに半年が過ぎた。

仕事に関してはもう、愚痴すらも出てこなくなった。

シフト表に添って勤務をこなすだけ。

特に楽しいこともない。

この世には私などいなくてもよいのだろう。

だが、いなくなった後に

パソコンのHDなどをみられるようなことがあったら、

恥ずかしくて墓の中からでも出てきていいわけしそうだ。

私には恥が多すぎるのだ。

夢の中では「魔法使いの弟子になった」などと自分に都合のいい妄想をして、

自分を何か特別なもののように扱って現実逃避をしている。

現実是一日中、看護師連中にバカにされ、

同僚の年輩女性達にこき使われているただのうんことり。

あの夢の中で正しかったことはひとつだけ。

誰かが中心になって作られたチカラの輪は

複雑に絡み合って世の中を作っているということぐらいだ。

チカラのあるものが、私のような無策無能の人間の時間を買っている。

そういうことだ。現実など、そんなものだ。

ふと顔をあげると、

私の横で爺さんが口をあけて私の手元を見つめている。

「あ、すみませんでした。お食事続けましょう。」

私はそういつて口にお粥を放りこんだ。

後ろでは「ご飯まだ食べてないです早くもってきてください」

と言いながら、自分の食事済みの茶碗を箸でたたいて叫ぶ婆さんがいる。

それをなだめて戻ってきたら、

別の爺さんが他人のおかずの皿に匙を突っ込もうとする。

「あなたのは目の前のこのお皿に入っていますよ。」

自分のものは食べてからおかわりをしてくださいね」

と、自分の皿を手持たせて落ち着かせてやる。

そして口をあけて無言で待っている爺さんの口にお粥を放りこむ。

いずれは私も年をとって、ここの爺さんのようになる確率が非常に高い。

最後までピンピン生きて往生際よく死ぬなんて、それこそ神業だろう。

できれば若いうちに、と思う時もあるが大抵は違う。

痛いとかなんとか言いながら、往生際悪く生にこだわる。

もしも本当にこの世の中に魔法みたいなものが存在するのなら、介護なんて無い世界ができてもいいはずだ。

本当に私は、バカな夢を見ている。どこまで現実から逃げればいいのか。

逃げ通せるわけもないものを。

「でも、それでもお前は夢見とるやないか、俺の夢を。
そろそろ俺に本格的にだまされて見る、っちゅー選択はないの？」
ある日の晩。丸坊主の男は私の肩を叩き、尚も親しげに語りかけた。

魔法使いの話 魔法の3つのタブーの話

だまされる気持ちは毛頭ない。こんなこと本気にするなんてありえない。

私もはつきり伝えたつもりだ。私の現実は変わらない。貴重な脳の休息時間にこんなこと考えたくない。

「それなのにこんな風に俺のことを夢に見て。やっぱり俺が恋しい??そりゃーそうだよなあ。

俺は君のことをどんなふうになっても最後まで面倒見たるって。」

もう、本当にやめてくれ。私は夢の中で大声を出した。

丸坊主は構わず話を続けてくる。

「今日も基本の基本を話そうね。魔法使いがやってはいけないことの話。」

それはあんたのように、人の夢に出てきて思考をかき回すことだ。もう本当にただなにも考えずに眠りたいのだ。

「そういうなつて。結構これもおもしろい話よ。

魔法使い、って何ができる人のことやと思う?

ゲームみたいに火とか水とかバシバシ出したりする人やと思う?それとも病気とか光で治したりする人?どう思う?」

他人の眠りを邪魔しない人。私の現実に干渉しない人。

ファンタジーの世界にきちんと閉じこもって

私に迷惑をかけない様にできる常識的な人。

「冷たいなあ。無視して話つづけさせてもらうからな。

魔法使いのやったらあかんこと。3つあります。テスト出しますよ。ひとつは時間コントロール、ふたつは錬金術、3つは命を操る事」

本当に意味がわからない。

この丸坊主は今日もうるさく語って私を逃がしそうもない。

夢なのに自分の意思で終わらせられないのが、私自身の弱いところだ。

仕方がない。誘いに乗って一緒に考えてみることにした。

魔法使いの3つのタブー。時間コントロール、錬金術、命を操る。

でもこれがタブーだというのなら、魔法使いになるなんてやはりつまらないものだ。

この3つができないと意味がない、というかお話にならない気がする。

人間がやりたいことはこの3つに集約されている気がしたからだ。

時間コントロールってのは時間を止めたり戻したり、何かしらするんだろう。

それがもしできるとしたら、片っぱしから恥ずかしい思い出を消して回る。

錬金術というのは、たぶんその名の通り、金目のものを練成するところかもしれない。

もしもそうなら、すぐに家の近くの河原の石を

激レアメタルに変えて売りつけて今の生活から逃れたい。

南の地方都市の単身用マンションかどこかでぼんやり暮らしたい。

命を操るなんてことができたなら、とりあえず若さをキープする。

やはり魔法なんて……。

「ろくなもんじゃない、何にもできないんじゃないの、って思った？」

丸坊主はにこりと笑って言った。

「でも考えてみ？今の3つのタブーに通じることってな、

魔法使いの力を使うまでもないことばかりやんか。

魔法なんか使わなくても人間が皆必ず最低限のオプション装置として
持つて出てきてるものばかりでしょう？」

それは屁理屈だ。そう言おうと思った私の口の前に、

丸坊主は人差し指を立てて私の発言を遮る。

「だってな、一日は24時間。生きてりや際限なくもらえるで。

錬金術だって、君の思うようになってないかもしれない。

しかし社会の中には錬金術という名前の創造性を駆使して、

金以上のものを作り出している人も多いやろ。

命だってあれやで？この世に生を受けたとき、

裸一貫で必ず持つて出てくるやないか。まあそれには……。」

丸坊主は少し言いよどんだ。

「それには著しく個体差はあるで？確かにある。でもな

みんなが必ず持つて出てくるものちゃうんか。

みんな持つてるんだから、魔法っちゅー特別なチカラ、使う必要ない。」

それは違う。私は異議を唱えた。時間も錬金術も命の魔法だって。個体差なくして楽をしたいからだ。あればあるだけ欲しい。

「ホンマにアホやな。いいか？時間も錬金も命すらもみんな自前で持っていてでているんやで。

最初っからもっているもんなんやから自分で気をつけてコツつかんだら、

別に不思議なことが起きなくなっただってどうにかなることなんやないのって話よ。

時間を戻したい、不老不死になりたい、レアメタル作りたい。くだらんわ。」

丸坊主は大笑いした。

「そんなこと人間が必死で創造力を育んで技術を磨いて、昔から繰り返し実験して近付いていつているでしょう？

で、もしそうならどうなるだろう、ってのも、

あらゆる媒体で自由に表現されていて、

個人的なイメージもあるでしょ？魔法でもなんでもない。

魔法ってのは、もっと、不思議なものをいうねん。」

しかし、不思議なものって何のことをいうのだろう。

「そこよ。そこなのよ。その分野が魔法の領域。

人間がアタマで想像できることなんてタカが知れとるわ。

想像もつかないことをするのが魔法。

魔法ってのを勘違いしないように3つのタブーがあるんやないの。キミが想像していること、願っていることは

今生でも叶う可能性があることばかりや。

魔法というのはそれ以上のものが起こることをいう。」

私は全く想像もつかずぼかんとしたままになっていた。

丸坊主は笑顔で私を見ていた。

「まあ、そういうことから。

その奇跡の領域ってやつをこれからどんどんみていけるようになるよ。

俺の弟子なんやから一生懸命勉強せな、な。

君はまだレベル最低だから、深入りせえへんけどね。」

その日はこれで終了だった。

魔法使いとの最悪なリアルファーストコンタクト

本当に妙な夢を見るようになってしまったものだ。

しかし現実的には何も変わらない。夢は自分の中身だけの事だ。黙っていれば何も起こらない。

翌日も何も考えず夜勤に向かい、そして無事に一夜を終えられた。

生物は昼と夜ではおのずと顔が違っていくものらしい。

明りを手に入れて、昼夜問わず活動が続けられるようになった人間ですら、

その呪縛から逃れられない。それを感じたのはこの仕事を初めてからだ。

老人たちの昼と夜の状態の差は激しい。想像がつかないことをする。怪我や事故がなく夜を過ごせただけで、私のような素人あがりはおつとする。

「おつかれさまでした」

夜勤の相方だった看護師とあいさつをして職場を後にする。

出勤のピークを少し過ぎた時間なので、バスは割と空いている。

いつもの時間にバスに乗り、大体いつもの席に座る。

乗っているメンバーもみたことがある顔ばかり。

通院途中の老婆だったり子連れの若い母親だったり、

私のような少しくたびれた感じのオヤジだったり。

まったりとした時間が流れている。自宅近くのバス停まで30分。

うとうとまどろんでいたら体感3分くらいだろう。そのあと自転車で20分で自宅へ。

夜勤後の自転車は結構疲れる。

この30分でうたた寝するだけでも結構すつきりする。貴重な時間だ。

ふと、誰かが私の横の席に荷物を押しのけて座った。

席は半分以上空席のはずだ。

遠慮がない老婆か、怪しい宗教の人かのどちらかだろう。

無視決定。私は目を閉じたまま、荷物を膝の上に抱きなおした。

「おい冷たいな。会いに来てやつたんやで」

ここ数カ月悩まされており、夢の中で聞きなれた声。

どうやら本格的にまどろんで私は夢の中にいるのだ……。

「こら！俺や俺やで！！魔法使いが会いに来ましたよ！

夢の世界の垣根を越えてあなたのもとにドスコスコと……！」

頭を馴れ馴れしくなで、時々気にしている毛髪を引っ張ろうとする失礼な手。

振りほどいて目を開けた。そこには小豆色のジャージに坊主頭のあの男が、

ニコニコしながら座っていた。

そんな、そんな……。

「アホな、って思ってる？思ってるんやろ。でも痛かったやろ？で、自分夜勤明けやろ？寝ぼけてる思っても仕方ないやろけどコレ現実やから。」

乱れた髪の毛の、呆けた私の顔が向かいの窓ガラスに映っていたのが見えた。

バスは信号で停車して揺れた。 私たちもそれに合わせて揺れた。

丸坊主はその後どうでもいいようなことを機嫌よく喋り続けていたような気がする。

しかしその内容は私の頭の中には全く入っていなかった。

夢で数か月で会い続けていた人物が、自分の隣に座っているなどという、

非現実的なことがあっていいわけがない。

私はとうとう、本格的におかしな人になってしまった。

もう少し早く病院に行けばよかった。薬が今更効くかわからない。

しかし今治療を始めたらこんな幻覚幻聴に悩まされることは無くなるかもしれない。

そうだ、落ち着け。これは幻覚幻聴だ。

夜勤明けで疲れてリアルにうたた寝しているだけだ。いつか覚める夢だ。

降りる予定のバス停に着いたアナウンス。私はいつものようにバスを降り駐輪場へ。

だがあの丸坊主もニコニコしながら私の後をついてくる。

私は全速力で自転車をこぎ続けた。

丸坊主は走って後ろをついてきていているらしい。後ろから大声が聞こえてくる。

「なあ、俺のこと徹底的に無視するつもりなんか？」これは幻聴幻覚だ。

「本当に信じてくれてないんやね？」早く覚めてくれ私の夢！

「なあちよつと待って、待ってって！！前ちゃんと見て走れ危ない！！」

本当に私に構わないでくれ！河川敷を私史上の限界速度で走り抜け

る。

「こら危ないで！！」私の背で丸坊主が大声で叫んだのを聞いた。
その時は自分の身体が宙に浮くのを感じた。

そこから先の数時間の記憶は今も残っていない。

私の次の記憶は、
痛みとともに病院の天井を見つめているところからスタートしている。

リアルファーストコンタクトその後の顛末

自転車で、河川敷から下の河原に自転車と共にダイブしたらしい。追いかけてきた丸坊主が、私の携帯電話で救急車や家族に連絡を取ったとのこと。

軽い脳震盪と頭部打撲に全身に数カ所の擦傷と打撲。右足首の捻挫。全治10日の怪我。晩まで様子を見て、症状が悪化しなければそのまま退院できるそうだ。

「しかしまあ様子見て、お仕事も2日位は休んでいただいた方がいいと思いますよ。」

診断書が必要でしたら帰りに看護師を通してお申し付けください」

医師は書類を見ながら事務的に、私にそう言った。

部屋には、あの丸坊主と私の母親、兄嫁とその息子がいる。

皆で医師と看護師に頭を下げた。医師は看護師と共に部屋を出た。

ベッドと小さなテレビ、一つの小窓しかないとでもこじんまりした個室だった。

その中に結構な人数が入っている。酸素が薄い気がした。

大体こんなふうに人に見られて横になるのは何年ぶりだろう。迷惑をかけてしまった。

とても恥ずかしい。酸素が必要以上に薄くなっている気すらする。

「まあ大事にならなくて良かったけど。相変わらず運動神経ないのねえ」

母親は私の頭をジロリと見ながら言った。

起き上って頭を触つてみると包帯が巻かれていて、打撲部分が冷やしてあった。

「いや、ある意味運動神経ありありですよ。ナイスバンジー。だってその瞬間はETみたいやったもん。正気の沙汰やなかった。たらーたらりらりら」

丸坊主が歌いながらET風に、人差し指を兄嫁と俺に向かって伸ばしてきた。

兄嫁はげらげら笑いながら人差し指を合わせた。

「それ超古いんだけど」「でもミハルさんその世代でしょ？」

「ちよつと何気にあたしのことババアっていつてんの？」

私が記憶をなくして寝ている間、丸坊主と兄嫁はすでに親しくなっている様子。

すでに名前で呼び合うほどになっているらしい。

私は腹が立って仕方がないので無視をした。

二人の楽しそうな様子を見て、兄嫁息子が割って入って人差し指を伸ばしてきた。

母親は説教を始めた。

「大体あんた、お友達が一緒に歩いているときに全速力するってないわよ。」

思いやりがないわ。合わせて一緒に歩いてくるのが普通でしょう」

否定も面倒なので黙ってはいるが、奴はお友達ではない。断じて、お友達ではない。

むしろ今回の事故の原因だ。魔法使いとか自称するなら防いでもいいはずだ。

丸坊主は母親や兄嫁たちにも見えているらしいので、現実には存在するようだ。

そういう病気の薬を飲む必要はないみたいだ。しかし……。

「まだ頭痛いの？メロン？」兄息子は頭の包帯を引っ張ってくる。

丸坊主が笑いながら「まあ若干くさつとるけどなー」とか言ってた。

「おやじメロンだな」

「お前もそうなるで。恥ずかしながらケンタのおじさんやねんで」

「俺はまだピチピーチ！わかる？ダジャレよこれ」

丸坊主と二人で変な踊りをしながら笑っている。兄息子ケンタは小学校3年生。

バカの第一次ピークの年頃なので、常日頃から放置プレイにしているが、

普段の5割増しに腹が立つ。本当に頭が痛くなってきた。

「とにかくねえ。35にもなってこんな迷惑かけるんじゃないのよ。今日お母さんも法事があるっていったじゃないよ。」

ミハルさんたちだってこれからケンタのスイミング合宿だしね。

みんな忙しいのよ。よりによって、なんで今日このタイミングで怪我するんだか」

すみません、としか言いようがなくてただ黙って頭を下げた。

「あんた今晚帰るんならひとりで帰ってきなさいよ。」

財布にお金少し足してあるから、お友達とタクシーで帰りなさい。

自転車はもう乗れなさそうだから捨ててもらったわ。

お力ネは後で返しなさいよ。

仕事行くのに困るだろうから、足治ったら母さんの自転車貸してあげる」

そして、丸坊主のほうを見て頭を下げる。

「じゃあ、ごめんなさいコバヤシ君頼んでいいかしら？電車ギリギリなのよ。」

お父さんはもう駅に向かつてるから、そろそろ着いてるかもしれないのよね」

コバヤシ君??丸坊主めお前コバヤシ君っていうのか?!
驚いて目をむく私をよそに話は勝手に進んでいく。

「ええですよ。まかしといてください」

「ありがとうね。無愛想な子だけどよろしくね」母親は丸坊主に頭を下げた。

それをみた兄嫁親子も帰り支度を始めたようだ。

「じゃあたしらもいくわ。ごめんねコバヤシ君」「いいっすよ」

「じゃーね」「おうスイミングがんばれよ」「チヨー頑張る!!」

私は頭を下げる。

「あ、あの……。迷惑掛けてすみませんでした……」。

ミハルさんたちもありがとうございます」

三人はへらへら笑って「仕方ないよ。アンタってどんくさいから」
いつもの一言だった。じゃね、と手をひらひら振って部屋から出ていった。

ドアが閉まると部屋は一気に静かになり、空気もピンと冷えてきた気がする。

部屋には丸坊主と私の二人だけだ。しかし、この丸坊主どうしてくれようか。

聞きたいことがたくさんあるが思考がまとまらない。しばらく沈黙が続く。

丸坊主自称コバヤシ それ以外は知りたくもない

「さて。何から話そうか」

沈黙を破ったのは丸坊主の男自称コバヤシ。

「聞きたいことばかり頭に浮かんでいるように見えるけども、

言葉が無いらしいな。まあ、自分ドンくさいからしゃあないけどね」

「お前に言われる覚えは無い」

コバヤシに向かって少し大声を出してみた。

「ほな、何か気の利いたこと言ってみいや」

……。

「お前、い、いつからコバヤシだったんだよ。」

なんで夢の中から出てこれるんだ、っていうかなんでお前の夢なんか見たんだ。

夢の中の人間が目の前に見えたら、頭おかしくなったって思うだろうが。

いつの間にかお袋たちと親しくなってるじゃねーよ、

大体魔法使いつて何だ、弟子つてなんでだよ。

本物なら事故防げたんじゃねーか。ふざけんなお前結局誰だ何なんだこれは」

一言話せたら疑問がどんどん沸いてきて、ますます思考が散漫になっている。

しかも最初の質問が「なぜコバヤシ」

全く気が利いた一言ではない。自分のバカさ加減に苛立つ。
興奮も高まり口の中も渴きだした。

「はいどうぞ。まあ少し落ち着けや」丸坊主がペットボトルの水を差し出す。

目の前にボトルを差し出し笑顔を見せる。

私が受け取り水を飲んだ瞬間も満面の笑顔で言った。

「ケンタと俺との間接キッスやねんで。キッスは久しぶりなんやろ？」

……。久しぶりに盛大に吹いた。

まだ落ち着かないうちに、丸坊主ことコバヤシが質問にひとつずつ答え始める。

「えっと、いつからコバヤシだったか、ということについて。

さっき名前をでまかせ言うてみたらコバヤシしか浮かばなかっただけ。

江戸川コナン少年探偵と一緒に。これからキミも俺のことをコバと呼んで可。」

丸坊主コバは私のベッドのそばで携帯電話をパタパタと開閉し始めた。

「壊れてるみたいやね。あ、暇やったからゲームの会員入ったで。

無料の」

「他人のものに勝手に触るな。それに勝手に会員とか入るな」

コバが触っていた私の携帯電話を取り戻す。コバは反省ない顔で質問に答え続ける。

「次の質問。俺の夢を見たり、俺が君の前に出たりすることについて。

俺はリアルに魔法使いだし、キミは俺と師弟関係の契約があるとい

うこと。

お袋さんたちと親しくなったのはまあ、なんつーのかね、俺の人徳だということ。」

人徳って。

他人の携帯電話使って勝手にゲームする奴のどこに人徳があるのか。

「人の事故を見過ごしたくせに」

「あ、いうたね。」コバは少し眉を上げて私を見た。

「事故は自分の過失やろ？話をよう聞かんと逃げまくって、自爆して河川敷バンジーしたんやからね。

お袋さんが言うように、一緒に並んで自転車押して帰ってくれたら防げたやろ」

なんだか腑に落ちないような気分だった。しかしそれが事実なのかもしれない。

頭が痛くなってきた、コバに怒鳴ることが面倒になってきた。もう奴と話しても疲れるだけだ。

「で、今日はどうするの？入院するの帰るの？」

コバは私に尋ねた。

「帰るよ。入院はしない」

「診断書とかは？」

「出してもらう。帰り道に職場に届けて、2日は休みもらえるようにする」

「ほな、先生にいうて一緒に帰ろうや」

「一緒には帰らない。電話とか救急車は感謝してる。でもあんたを

信用してない」

ベッド横の荷物をつかんで立ち上がる。捻った足がかなり痛い。松葉杖を使って立ち上がる。使い慣れていないのできこちない感じが、
無いよりは楽に歩ける。

「せやけど俺、お袋さんに頼まれてんで。」

「関係ないし」

コバは私から荷物を奪い取るように取り上げた。

「お袋さんがいうたんやっ。頼みますーって。俺は任せてくださいって返事したんや」

本当に面倒な奴だ。しかし荷物を持つてくれるのは助かる。

今回はコバの申し出を受けて荷物を持つて一緒に帰宅することにした。

家についてからお礼を言っ、二度と私の目の前に現れないように、しっかり頼んで引き取ってもらおう。

帰り道。職場で電話で事故報告後タクシーで職場へ向かい診断書類を提出。

診断書には2週間の自宅療養が必要と記された。

私の職業を聞いた医師が療養期間などを若干修正したらしい。

ただ2週間も職場が休ませてくれるかどうかが気がかりだった。

派遣社員だったころの、切り捨てられた歴史。

「そんなこと無いと思うよ」

タクシーの中でコバは私の肩をたたいて言った。私はコバの顔をじろりとみた。

「ネガティブやなあ。キミの代わりの新人雇って使い物になるまで

の期間と、

仕事になれたキミが復帰するまでと、どっちが長いと思ってるの？」
「それもそうだけど……」。

「ほな自身持つて頭下げたらええがな」。

河川敷バンジーして怪我しました。休みます、すんませんって言え
ばええがな」

コバはそういいながら肩をさらに何度もたたき、ポケットからタバ
コを取り出す。

「そうだな。それしかない。というかそれ以外できることがない。
でも楽しんでバンジーしたわけじゃない、決してない」。

それと、タクシー内は禁煙だからそれしまつて。ホントあんた迷惑
だから」

コバのタバコを奪い取つてポケットに入れなおした。コバは肩をす
くめて笑う。

「とことんネガティブだな。まあがんばれ。外で待つてやるから」
「待たなくてもいい」「待たせて?」「仕方がないので待たせてやる」。

私のそばに居続けるコバヤシに、
苛立ちつつも少しずつ慣れてきてしまっている。
本格的に疲れているなと思った。

職場についたら施設長室に通された。

採用面接以来、入ったことが無い部屋だ。

やはり使い捨てられてしまうのだろうか。不安が頭をよぎる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5090t/>

魔法使いの弟子覚書

2011年10月9日03時52分発行